



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# アイ アム ソーリー

1976年の初夏、スペインに滞在中の日本人ジャーナリスト有田氏とマドリッド在住10年になる武部氏は、夫人連れでフランスとイタリアに10日間のドライブ旅行をした。有田氏は日本を発つ前に大学時代の友人から武部氏のことを紹介されマドリッドで初めて会った。

武部氏は日本で定時制の大学を卒業後、ほとんど無一文でマドリッドにやって来て、マドリッド大学で2年間スペイン語と美術を学び、観光ガイドなどの仕事を経たあと、数年前に日本とスペインの絵画とスペイン陶器の輸出入店を開き、3年前にはマドリッドの中心街の一画に店を構えるようになった。武部氏は30才を過ぎたばかりであったが、日本食に対して強い執着をもち、スペイン料理店や中華料理店で食事をするときにも醤油や日本製の調味料をもち歩くほどであった。

武部氏はスペイン人が大嫌いだと言い、仕事以外の交際は一切断っていると述べた。有田氏が「スペイン人のどこがきらいなのですか？」とたずねると、武部氏は「そうですねえ、どこと言われても……。まあ、敢えて言えば彼らの我(が)の強いところ、自分の非を認めず、あらゆる方法で言い逃れしようとするところですかね……」と答えた。武部氏は3年程前に、画廊経営のかたわら従事していたガイドの仕事の中に、観光旅行で来た武部夫人と知りあい、2年前に結婚した。武部夫人はスペインの気候、国柄、国民を愛し、スペイン人との交際に積極的であった。

有田夫妻と武部夫妻の旅行は、車の所有者である武部氏が運転し、有田氏はガソリン代を負担するという約束で行われた。スペインの地中海岸からフランスに入り、マルセユ、ニースを経てイタリアに入り、ピサからローマに到着した。航空会社を通じて予約したホテルをみつけるのに一行は非常に難渋し、ようやく発見したホテルの前の通りは営業車しか通れないことが判明したため、ホテルから200メートルほど離れた路上に駐車することになった。有田氏は3カ月のスペイン滞在を終えてパリ近郊に移る途中であり、かなり荷物が多かった。有田夫人はひと月前にスペインにやって来て、スペインとポルトガルの旅行中に買物に精を出したので、有田夫妻の荷物は更に多くなっていた。

---

このケースは、慶應義塾大学ビジネス・スクールの石田英夫教授がクラス討議の資料として作成した。  
〔1977年3月〕